広報資料

■

★広報紙・有線放送などにご利用下さい

◎こどもを水の事故から守ろう

六月から七月、八月へと暑さが加わってくると、こどもの水泳や水遊びによる事故がグングンふえてきます。

昨年夏（六月～八月）の場合をみても、水の事故によるこども（中学生以下）の死者は、全国で八四二人の多きを数えましたが、この数字は、同じ期間内の交通事故によるこどもの死者四六一人に比べると、ほとんど二倍にあたっています。

月別の死者数をみると、六月が二一六人で、全体としては、まだ学校にあがっていない幼児が中心であったのが、七月は、学校が夏休みにはいったためもあって、二九〇人にふえ、さらに八月は三三六人と、暑さが増すにつれて水の犠牲者が著しく増加しています。

昨年夏の期間に、こどもが事故にあっている場所と行為との関係をみると、最も多いのが海をはじめ、河川、湖・沼・池あるいはプールなどで水泳をしていた者で、事故者総数一、三四七人のおよそ三分の一にあたる四一三人にのぼっていますが、次いで海、河川・湖・沼・池、用水堀などで水遊中に事故にあった者が二五三人、これらの場所の近くを通行中に誤って深みにはまった者が一二五人を数えています。

こどもを水の犠牲から守るためには、保護者やおとな一般はもちろん、施設の管理者もこどもの危険な水泳や水遊びについて関心を高めなければなりませんが、そのための対策として、とりわけ次の点に気をくばるよう呼びかけます。

保護者＝①こども同志だけで、水泳や水遊びに行かないよう、ふだんからよくいいきかせておく。②特に、小さなこどもは、ひとりで外出させないで、常に目を離さないようにする。③こどもたちがよく遊ぶ川や用水堀などで危険な個所があるときは、隣近所が協力してサクなどを設けるようにする。④危険な場所で遊んでいるこどもを見かけたときは、その場で注意して安全な所で遊ぶようにさせる。

施設の管理者など＝①危険地域には、水泳禁止の立て札をこどもによくわかるよう、はっきりと、できるだけ多く設ける。②参加人員に応じた安全施設を整備する。特に、救命道具や救命艇を必ず準備しておく。③常に適当数の監視者を配置しておくとともに、、参加者への注意事項を徹底させるよう努める。

◎歩いて自然に親しもう

—自然に親しむ運動—

（七月二十一日～八月二十日）

この運動の趣旨は、国立公園等の自然公園やその他景勝地および休養地をはじめとする自然環境に親しむことを通じて、人関としての情操を高め、健康を養い、自然に対する知識と理解を深めるとともに、自然環境における正しい利用の仕方を感得し、あわせて自然保護と国土美化の精神とを普及させることです。

この運動の実践は、各都道府県および財団法人国立公園協会が主催し、総理府をはじめ関係各省の後援、そして、日本山岳協会等の野外活動になじみの深い各種の団体の協力によって行なわれます。

行事の内容としては、本運動の中央行事である国立公園大会の開催、キャンプ・登山・水泳など各種の講習会の開催、キャンピングあるいは海水浴モデル地区、自然公園利用モデルコースの選定、国立公園管理員や自然公園指導員、学識経験者等による利用者に対する野外解説が、それぞれの地域の実情に応じて企画され、これらの実施を通じて、事故の予防、環境の美化、公徳心の高揚等がはかられます。

中央行事としての国立公園大会は、関係各団体を中心とする野外活動隊と、これに全国各地からの参加者を集めて行なわれますが、第十一回を迎える本年は、八月六日・七日の両日にわたり、大山隠岐国立公園三瓶山地区（島根県大田市）において開催の予定です。

なお、本年度の自然に親しむ運動は、「自然に親しみ、歩くことの奨励」を重点目標として、実施される予定ですが、これは、機械化と交通機関等の発達した今日の社会情勢下において、国民の健康増進と自然への認識を深めるために、自分から歩くことによって、素朴な自然に親しむことの重要性を知り、同時にまた、「東海自然歩道」に対する国民的共感を、一層助長させるためのものです。

ともあれ、この運動期関中はもちろんのこと、四季のおりおりを通じて、私たちは、自然に親しむことによって、自然の恵みの偉大さを知り、また、さらに、自然の摂理の中から、人類発展の深い知性を感じさとることが、今日、最も必要なことです。

みんなの力で
俗悪な広告を
追放しよう！

★七月は俗悪広告追放月間です。

《ある青春》

企業的農業にいどむ フレッシュマン

阿蘇郡白水村
後藤春雄君

後藤春雄君。肥育牛の多頭生産に青春の夢をふくらませる二十一歳の若者である。

昨年の肥育頭数三十二頭。一家の八ケタの粗収入のうち、彼の赤牛による収入が約八〇%を占めた

三十九年に経営伝習農場卒。と同時に、彼のことばを借りれば〝成功は度外視〟して赤牛にとり組んだ。といっても、彼の場合、立地条件もよく、元牛購入が容易で、省力化も可能といった緻（ち）密な計画があった。

周囲の開田ブームの中で、あえて牧草地づくりへ踏み切ったことにもみられるバイタリティの成果は、最初の二頭から四年間で三十二頭へ。そしていま、彼の目の前には、彼が精魂こめて改良した二、一ヘクタールの牧場に青々と牧草が伸びている

昨年経伝を卒業した、弟の達雄君も参加して、共同経営の足並みも揃った

つややかに光る赤牛の背にブラシをかけながら、〝目標は百頭の育成です〟と、首をちょっとかしげながら、明るく答える彼のことばの端々にも実績の上に立った自信があふれている

彼をリーダーとし、将来は共同牧場で肥育牛の共同出荷をと意欲を燃やす若い仲間たちの研究グループの中で討論しあい、暇をみては、釣りやギターに興ずる彼 そういった彼は、また黒塗りの自家用車がピッタリの、近代感覚あふれる企業的農業マンでもある

一家の後継者としてだけでなく、グループの仲間たちにとっても、まさに「頼もしいヤツ」なのである。四十三年度県農業経営コンクール新人王受賞。

グループ員が牧場に集まった。早速、青空討論会が始まる。研さんの時間でもあり、楽しい時間でもある。

赤牛の背にかけるブラシ一つにも愛情がこもる。